

薩南諸島のアリ相の調査と放浪種アリ類

福元しげ子

Surveys of the Ant Fauna and Tramp ant Species in the Satsunan Islands

FUKUMOTO Shigeko

鹿児島大学総合研究博物館
The Kagoshima University Museum

要旨

奄美群島およびトカラ列島のアリ相の調査を行なうとともに、硫黄島での放浪種のモニターを継続した。また、薩南諸島北部（トカラ列島～大隅諸島）の地域から記録のあるアリ類のできるだけ完全なリストの作成を試み、それをもとに放浪種の位置づけを試みた。

はじめに

奄美群島の中では加計呂麻島はアリ相が充分解明されていなかった。寺山(1981)は加計呂麻島で初めてアリ相を調査し、4亜科13属21種を記録した。筆者と共同研究者(山根正気)は2015年に呑之浦と高鉢山を調査したが、2016年には弓師岳、安脚場などでサンプリングを実施した(山根; 2016, 山根ほか, 2017)。2017年にはやはり調査が完全でない喜界島でアリ類のサンプリングを行った。トカラ列島のアリ相は、原田ほか(2014)によってまとめられているが、筆者は2017年に口之島で主に山地帯のアリ相を調べた。

これらの一連の調査結果をもとに、薩南諸島南部(奄美群島)と同北部(トカラ列島以北)から記録のあるすべての種を網羅したリストを作成した(山根, 2016; 福元, 2016; 山根・福元, 2017)。同時に、放浪種(外来種の中で人為環境に適応し広域分布する種と、外来種かどうかは不明であっても人為環境に強く依存し分布を拡大している種)の分布パターンを明らかにした。

調査地と調査方法

2016年6月9日～11日に加計呂麻島の数カ所でアリ類の調査を行なった。また定期船や海上タクシーが行き来する加計呂麻島の生間港と奄美大島の古仁屋港でサンプリングを行なった。草地、二次林、風衝林、道路脇、住宅地、攪乱地、港において、落葉や土篩い、石起こし、朽木くずしや枯枝わり、見つけどりによりアリ類を採集した。人家周辺ではチーズベイトを用いて地表活動性の種を採集した。道路脇ではアカメガシワの花外蜜腺に誘引されたアリを採集した。また、2017年8月21日～22日に喜界島の数カ所でアリ類の調査を行なっ

た。トカラ列島の口之島では、2017年5月16-18日に前岳および集落周辺でサンプリングをした。

放浪種については、硫黄島において2012年から実施しているアシジロヒラフシアリのモニタリングを2016年4月30日に実施した。2017年3月7日～10日には竹島・黒島・硫黄島調査において放浪種を中心とした調査を実施した。これら調査の結果をもとに薩南諸島北部における放浪種の生息実態をとりまとめた。対象とした島は、宇治群島の宇治島、草垣群島の上之島、上之三島の硫黄島・竹島・黒島、大隅諸島の口永良部島・屋久島・種子島、トカラ列島の臥蛇島・口之島・中之島・諏訪之瀬島・平島・悪石島・小島・小宝島・宝島・横当島の合計18島である。

結果と考察

加計呂麻島において、2016年に4亜科18属33種が採集され、2015年の調査と合わせて、4亜科22属38種のアリを記録した。従来の記録を合わせると、4亜科26属、44種となった(山根ほか 2017)。クサオオアリの南限はこれまで屋久島であったが、今回奄美群島から初めて記録された。古仁屋港では8種、生間港で7種、合わせて10種が採集された。ほとんどすべてが放浪種あるいはそれに準ずる種であった。

薩南諸島北部(トカラ列島～大隅諸島)の地域から記録のあるアリ類のできるだけ完全なリストの作成を試み、新たに記録した種を合わせると、8亜科47属117種を数えるに至った(山根・福元 2017)。

薩南諸島北部において20種を放浪種と認定した(福元 2016; 山根・福元 2017)。これら20種のうち、16種が鹿児島県本土まで到達している。各島における放浪種の比率はほとんどの島で20%から30%台である(原田ほか 2013)。奄美群島では96種のうち26種(27.1%)が放浪種と考えられた(山根 2016)。大きな港に行けばそこに生息しているアリの種の半分前後が放浪種ないし「外来種」である。鹿児島県本土から奄美群島にかけて緯度が下がるにしたがい「外来種」率が上昇している(原田ほか 2013, 2014)。

現在のところ、「外来種」ないし放浪種の生息は、港や集落など人為的攪乱の激しいところにほぼ限られている。その意味では、これらの種が在来のアリ群集や生態系に及ぼす顕著な悪影響は報告されていない。しかし、アシジロヒラフシアリ、オオシワアリなど一部の種は樹木の多い公園、良好な二次林などに侵入しており、またアシナガキアリは将来的には森林に侵入する可能性がある。これらの種についての生息実態のモニターが今後重要であろう。

引用文献

- 原田豊・福倉大輔・栗巢連・山根正気 2013. 港のアリ-外来アリのモニタリング-. 日本生物地理学会会報 68: 29-40
- 原田豊・榎本茉莉亜・西俣菜々美 2014. トカラ列島のアリ. Nature of Kagoshima 40: 111-121
- 福元しげ子 2016 薩南諸島北部のアリ相. 鹿児島大学生物多様性研究会(編), 奄美群島の生物多様性, pp. 133-142
- 山根正気 2016 奄美群島には何種のアリがいるか. 鹿児島大学生物多様性研究会(編), 奄美群島の生物多様性, pp. 92-132
- 山根正気・福元しげ子 2017 薩南諸島における放浪種アリ類. 鹿児島大学生物多様性研究会(編), 奄美の外来生物, pp. 108-131
- 山根正気・福元しげ子・前田芳之・佐藤幸雄 2017 奄美群島加計呂麻島からのアリ類の記録. 日本生物地理学会会報. 71: 131-137